



—そうですね。例えば、3年生国語の「インタビュー」の単元は7月。社会では6月に商店街の見学に出かけて、お店の人にインタビューする活動がありますね。

—ということは、まず6月に国語の授業でインタビューについて学び、続いて7月に社会で商店街の見学に行き、国語で学んだインタビューの方法を活用して学習するほうが、効果的ですよ。

—確かに。子どもたちにとってもそのほうが自然ですし、「国語で勉強したことを生かして、商店街の人たちにインタビューすることができた！」という達成感というか、学んだことが役に立ったという実感が生まれますね。

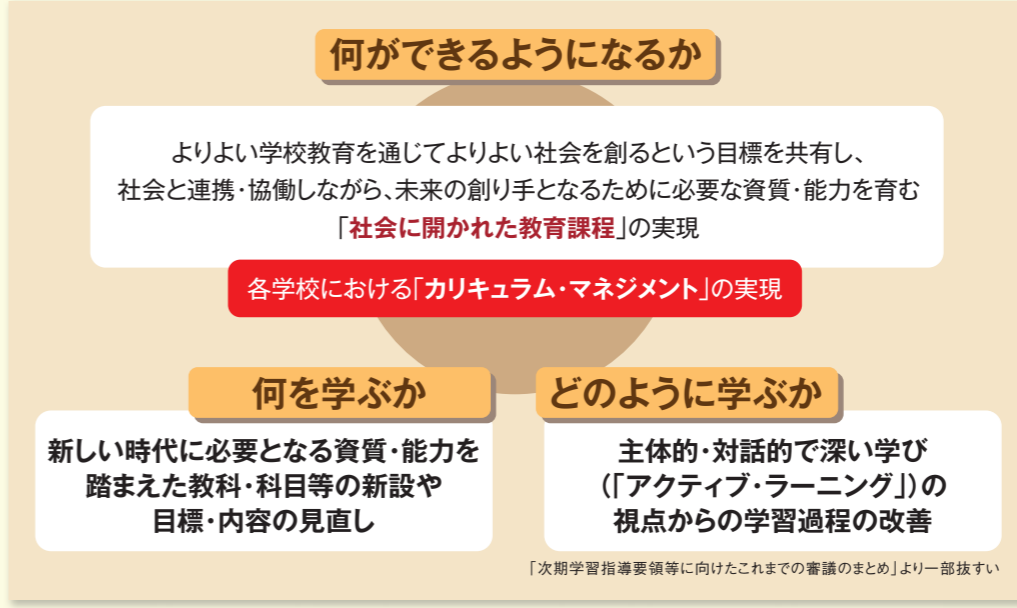
学びのネットワーク化を図る

「学びのネットワーク化」というのは、そういうものだと思います。そのためには、今の例でいくと、教科書を元にして、国語は国語で、社会は社会で立てた年間指導計画の通りに学習を進めていくと、意味のあるつながりが生まれてくれないということになります。教科書の順では7月に学ぶことになっていた国語のインタビュー単元を、社会の商店街見学を行う6月ないしその前に移して学習することが必要です。こうした、教科・領域の学習を、教科書通りの単元配列から、子どもにとって

カリキュラム・マネジメントの大切な視点
—カリキュラム・マネジメントとは、ずばり何をすることででしょうか。
—一言でいうとすれば、それは「子どもの学びのネットワーク化を図る」ということになると思います。国語で学んだことを社会の学習に生かしたり、音楽で学んだことが国語の学習につながったりというふうに、教科や領域ごとの学びを意味のあるつながりとして、意図的なネットワークを作っていくことだともいえます。
—なるほど。しかし、教科・領域ごとに年間指導計画に沿って学習を進めれば、自然とそれぞれで学んだことはつながってくるのではないのでしょうか。
—教科や領域ごとに学習指導要領に示されている内容を、定められた授業時間数に沿って学べるようにしたのが各教科等の年間指導計画です。指導計画は、一年間かけて定められた内容を無理なく子どもたちが学べるように工夫して作られていますから、確かにこの計画に沿ってそれぞれの教科の学習を進めれば、効果的に授業を展開することができそうですね。その一方で、年間指導計画をいくつかの教科で並べてみたときに、似たようなことをやっているなど感じることはありませんか。

本誌前号で、新しい教育の理念としてカリキュラム・マネジメントを取り上げました。反響も大きく、先ごろ公表された中央教育審議会の文書にもコア(中核)な部分にそれが位置づけられています。
「カリキュラム・マネジメントは、教師の新たな腕の見せ所」と前号の解説で結びの言葉とされた東京学芸大学の中村和弘先生に再びお聞きしました。

東京学芸大学
准教授
中村 和弘
なかむらかずひろ*愛知県生まれ。川崎市内の公立小学校教諭、東京学芸大学附属世田谷小学校教諭を経て、現職。専門は国語科教育学。中央教育審議会「国語ワーキンググループ」委員、「言語能力の向上に関する特別チーム」委員。

意味のある学びのつながりが生まれるように、意図的に関連させたり時期を移したりして配列を組み直す作業が、カリキュラム・マネジメントの大切なところだと思います。
—だんだんわかってきたように思います。カリキュラム・マネジメントと聞くと難しくそうですが、「子どもにとって意味のある学びのつながり」ということがポイントなのですね。先ほどの例ですと、国語と社会とでインタビューという言語活動をつなげるということだったと思いますが、他にはどのようなつながりがあるのでしょうか。

私はこのところ、つなげ方には3種類あるのではないかと考えています。「言語活動のつながり」「題材のつながり」「言葉や思考のつながり」の3つです。

一つ目の「言語活動のつながり」とは、今も述べているインタビューのような活動のつながりです。現行の学習指導要領では、各教科における言語活動の充実が重要視されていますが、この方向は次期学習指導要領にも引き継がれる見通しです。話し合う、レポートを

書く、発表する、新聞にまとめるなどの言語活動が、各教科の学習活動として有機的につながっていくように工夫していく必要があります。
—先生が「hito*yume」の前号に「グループで話し合う」という言語活動を例にして説明されていたことですね。

はい。二つ目の「題材のつながり」というのは、例えば、2年生の国語の説明文で「たんぼのちえ」という教材がありますが、この学習と生活科の「春さがし」で実際にタンポポを見る活動をつなげてみるなどの工夫です。国語では、タンポポについての文章を読んで、言葉を通して学びます。生活科では、実際にタンポポが咲いているその場で、タンポポを見たりさわったりしながら直接的に学びます。学び方は教科それぞれですが、対象となっている題材をつなげることで、双方の学習への興味が高められると思います。

—なるほど。それで三つ目の「言葉や思考のつながり」というのは何でしょうか。

例えば、算数で「長方形の横の辺の長さ」という言葉と「三角形の高さ」という言葉が出てきます。「長さ」と「高さ」とはどう違うのでしょうか。あるいは、「三角形の高さ」の「高さ」は、「スカイツリーの高さ」や「12時の太陽の高さ」と同じでしょうか、違うのでしょうか。このように、各教科や領域を通してよく使われる、けれども大切な言葉に着目を

して、教師が教材研究をしたり、授業の中で意図的に扱ったりして、ゆくゆくは子ども自身が言葉に留意しながら学べるようにしていくということ、これが「言葉のつながり」です。
—また、「思考のつながり」というのは、国語の4年生に「花を見つける手がかり」という説明文がありますが、この文章では、チョウが花を見つけれられるのは、花の色なのか、においなのか、形なのか、少しずつ条件を変えながら実験を進めて行く様子を読んでいます。これは理科の5年生で学ぶ条件に目を向けて調べたり考えたりする思考につながっていくものですね。

—さして、次期の学習指導要領では「資質・能力」がキーワード。これまでの「学力」とはどの異なるのでしょうか。

中教審では「資質・能力」を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性等」の3つと整理しています。いわゆる学力の三要素なわけですが、「学力」という言葉に比べ、「資質・能力」のほうが幅広い感じがしませんか。

—確かに「学力」というと、知識や技能といったイメージが強いですが、それもちろん大切なわけですが、実際にいろいろな課題に対応するためには、知識や

技能を身に付けているだけでなく、それらをどのように使いこなしたり、適用したりしたらよいかを考える思考力や判断力などが必要ですね。また、そもそも課題の解決に向かっていることとする、学びに向かう力なども原動力として欠かせません。
—では、「資質・能力」の育成に向けて、実際の授業ではどんなことが求められてくるのでしょうか。

—一つは、これまで同様に教科で学ぶべきところはしっかりと学ぶということ。今回の審議で各教科等の特質に応じた「見方・考え方」が示されたのも、そういう理由です。もう一つは、それが本稿のメインテーマなのですが、教科等を横断した形で、思考力や判断力を身に付ける工夫をしていくということ。つまり、子どもの資質・能力を、教科・領域の学習のネットワーク化を通して育成するカリキュラム・マネジメントこそ求められるのです。やはり結論は「教師の腕の見せ所」ですね。

「学びのつながり」3要素

①言語活動のつながり
●国語 7月「インタビュー」
●社会 6月「商店街の見学」

②題材のつながり
●国語 「たんぼのちえ」
●生活科 「春さがし」

③言葉や思考のつながり
●算数 図形「長さ」「高さ」の概念と各教科や領域での言葉
●国語 4年「花を見つける手がかり」の説明文と理科5年条件設定の実験思考